
異世界とオレとハーレムと？

RAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界とオレとハーレムと？

【Nコード】

N3470Z

【作者名】

RAI

【あらすじ】

高校を浪人したオレは、RPGにはまっていた。一般的に廃人と呼ばれる域までに達した。

ある日一通のメールが届き、俺は異世界へトリップした…。

キャラ設定（前書き）

キャラのステータスなどをのせていきます。

各話のあとがきにものせているので、ただの自己満足です。

どうでもいいので読み飛ばしてもOKです。

キャラ設定

キャラ設定です！！話別にのせていきます。

一話

クロノ 男 エルフ？

装備

グリンディア（弓）

ローブ

ステータス

Lv . 1

HP 3 4 9

MP 2 4 5

AP ? ? ?

DP 5 9 7

アリア 女 ハーフエルフ

装備 無し

ステータス

Lv . 3

HP 3 9 2

MP 3 4 7

AP 1 2 4

DP 2 5 6

二話

クロノ 男 エルフ？

装備

グリンディア（弓）、ローブ、布の靴、グローブ
ステータス

L v . 1

H P 3 4 9

M P 2 4 5

A P ? ? ?

D P 5 9 7

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ
ステータス

L v . 3

H P 3 9 2

M P 3 4 7

A P 1 2 4

D P 2 5 6

三話

クロノ 男 エルフ？

装備

グリンディア（弓）、ローブ、布の靴、グローブ
ステータス

L v . 4

H P 3 9 4

M P	4 6 2
A P	5 8 5
D P	5 9 7

使用魔法 ファイアボール、ウォーターボール、サンドボール、

 ブラストボール（～～ボール）

 ゴリアテ（三倍も）

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ
ステータス

L v	5
H P	4 2 6
M P	3 7 4
A P	1 5 3
D P	2 7 3

使用魔法 ウォーターボール、ヒール

01話　始まりと出会い？

俺は年齢的には高校二年の男である。あまり顔立ちも良くなく、スポーツもできない。学校にも行っていない。そう、浪人である。受からなかったのである。今はいわゆる『ニート』をやっている。勉強する気もない。

そんな俺が、今ハマっているのがRPGだ。なんと言ってもあのコツコツ感が堪らない。美少女なんか出てくると…最高だ…。

俺はいつもどおりRPGをやっていたら一通のメールが届いた。

「…誰だ？メールをしてきそうな友達には居ないぞ？」

とりあえずメールを開いた。ところが、画面がブラックアウトし何も表示されなくなった。

「はあ？」

と思いつつも、しばらく待ってみた。十分ぐらいだろうか。画面に入力画面が出てきた。

『貴方の性別は？』

無論男だろう

『貴方の種族は？』

種族？まさか、RPGか？ええつと？『ヒト、獣人、エルフ』か。エルフだな。

よし！と決定をクリックした瞬間、俺の心臓が止まった…。

俺は薄れ行く意識の中何も考えることができなかった。

俺は、草むらの中で座っていた。ここはどこだろう。俺は死んだのか？肌触りの良い服を着ている。右手には長い弓を持っている。左手で耳を触ってみた。えっ？尖っている？

さほど遠くない所でヒトと何かが戦っている。距離は…2〜3キロ？あれ？おかしい。俺の耳ってこんなによかつたっけ？

そう思いつつもヒトを助けるべく俺は走り出した。体が軽い。速く動ける。速く、もっと速く。そうしているうちに戦っているそばの丘の上についた。

見たところヒトの方が劣勢だ。ヒトの方が数で勝っているが、魔物？の方が力が強く人の攻撃が効いていないように見える。俺はすぐさま弓を構えて矢をつがえる。

見よう見まねだが、まるで磁石でも付いているように矢は魔物の頭に吸い込まれていく。さらに二本、三本と放っていき魔物を全滅させた。魔物は人型だった。

とりあえず、村人たちに近づいてみる。

「有難うございました。今、代表の者を読んできますので少々お待ちください。」

そう言っただけで走っていった。ん。なんか嫌だな。こんなに敬語使われたこと無いぞ？

考え込んでいると突然話しかけられた。見た感じ村長のようだ。村長「村を守っていたいただき有難うございました。この村の村長のダルクといいます」

中々体格のいいおっちゃんだ。

「どういたしまして。それよりもさっきのは何ですか？」

「さっきのはこの辺に住む魔物です。ある程度の群れを作って生息しているようで…。ご存知ないんですか？」

「えっ、ええ、まあ」

「今夜はどうされますか？もし泊まってくださるなら、最大限のおもてなしをさせていただきますが。」

「いいんですか？じゃあお願いします。」

「ええ。どうぞ、こちらです。」

そう言っ、先頭を歩いていった。村の人は様々だった。腕にも毛が生えている女性もいたが、人の方が多いようである。

建物も、木と藁で作った簡単なものだ。村長の家についた。正直言っ、豪華だ。

村長に中へ通される。中も豪華だ。それにしても、他家との違いはなんだ？

「お部屋の準備が整うまで、この部屋で少々お待ちください。」

「はい。そういえば、まだ名乗っていませんでしたね。俺はクロノ…？クロノ…」

なんでだ？自分の名前がわからない。

「クロノ様ですか。私はダルといいます。」

「はっ、はい」

「それではごゆっくり。」

そう言っ、村長は出ていった。

「ふー」

それにしてもなんでだ？自分の記憶が…ない。

名前…分からない。うーん…。

「あっ、あの。」

「ん？何？だ…。」

美少女だ…それも絶句するほどの。髪はまっすぐに伸ばしており柔らかな金色だ。目は青く、クリっとしている。スタイルは抜群によく、胸は少女とは思えないほど膨らんでいる。かといって、大きすぎる事もない…ぴったりだ。

「ク、クロノ様っ！」

「…」

「私を仲間にしてください！！」

「はあ？」

俺の記憶が正しければ、人はエルフを恐れるはず…。

「俺はエルフなんだ。」

「えっ？で、でも怖くありませんよ？？」

「えっ？」

「はあ…。じゃ——『こら！アリア！』」

アリア「！！」

アリアと呼ばれた女の子？は逃げていった。

「家のアリアが失礼をしました。すみません」

家の？ということとはさっきのこと話しておいたほうがいいな…

「いえいえ。それよりも、アリアちゃんに仲間にして…って頼まれたんですけど…」

「そうですね…アリアが…。では、連れて行ってください。」

「はあ？何ですか？」

「い、嫌ならいいんです！すみません。」

「いや…別にいいんですけど…。何故です？」

「アリアは…人とエルフの間に生まれたんです。人に近いですが、人より魔力が高く恐れられています。」

「なので、生まれたときから周りに避けられているんです。」

「ふー…。わかりました。でも、なんで私なんですか？」

「強いから…？」

「ようにはなんとなくらしい。」

>>>アリアが仲間になった<<<

01話　始まりと出会い？（後書き）

<補足説明>

最初に言います！主人公は死んでいます。主人公の武器は謎の空
間（現在）にあり、出し入れ自由です。アイテム

クロノ　男　エルフ？

装備

グリンディア（弓）　　ローブ

ステータス

Lv・1

HP　349

MP　245

AP　????

DP　597

アリア　女　ハーフエルフ

装備　無し

ステータス

Lv・3

HP　392

MP　347

AP　124

DP　256

02話　村にて

一日目

俺は今村長の家にいる。ベッドも柔らかい。と、言ってもスプリングベッドには敵わないが…。

部屋は、広い・・・すごく広い。日本で言う豪邸。戦闘で使った弓は、体の中に吸収されていた。なんとなく念じれば出てくる。

「すみません。お食事の用意ができました。」

「わかりましたあ」

今話しかけてきたのは、部屋の外にいる使用人だ。確か・・・ア\nンナさんだった気がする。結構かわいい。こう・・・なんか、守つてあげたくなるような感じ。つか、間延びした声になってしまった。

リビング？に降りたら、豪華・・・と思いきや普通の食事が並んでいた。少し硬そうなパン。謎の野菜が入っているスープ。野菜の和え物だ。正直俺感覚で言えば少し質素な感じだ。

「どうぞ、此方にお座りください」

村長が客人とはいえ、普通の人に頭下げまくるのはどうかと思う・

・

「はい。」

よし！今回は間延びしない声が出た（笑）

さつきから無音だ。食器もフォークも木製なのでほとんど音がない。ある音といえば咀嚼の音……。しかも俺だけ……。村長とアリアはまるで貴族のように静かに、優雅に食べている。

「クロノ様はどちらへ向かわれているのですか？」

「えっと……」

俺はこの世界の地理についてまったく知識がない。とりあえず適当に……

「実は今までひとつのところに落ち着いたことがないんです。しかし、これからはアリアさんも一緒に旅になります。ですので、自分としてはひとつの所に落ち着きたいです。どこかいい町はありませんか？」

「うーん。王都の近くにある『カルム』はどうですか？あの町なら、ギルドもありますし王都が近いので物流も盛んです。」

「でわ、とりあえずその町に向かいます。」

こうしてこの世界の記念すべき？第一食が終わった。

部屋に戻った俺は、今の自分の状況について考えた。

まず俺は、自分のことを忘れかけてる。下の名前は思い出せない。前の世界のことはある程度は覚えている。しかし地名や人名などは思い出すことができない。

俺はこの世界についてまったく知らない。まあ、当然だが……

こんなものであろうか……。そういえばこの部屋には油に糸をたらしたランタン？があるだけだが十分に明るく感じる。

昼間の戦闘のときも、遠くの音が聞き取れた。身体能力も上がっていると考えてもいいだろう。

ローブをよく見てみると、何かわかった。防御力が高く、丈夫だ。という大体のことはわかった。

・・・わけわからん。そろそろ寝るか

～二日目～

おそらく朝早くにおきた。目覚めがいい。水で顔を洗い、昨日夕食を食べたところに行った。昨日の夕食とは違い、肉料理がある。

しかし、それも村長の前だけでアリアの前にはない。村長の顔を見るとあからさまに『しまった・・・』という顔をしている。

それから5～6分、話し合い・・・。

そこで話したことをまとめると・・・

エルフは肉を食べるのを嫌う

←

だから夕食は肉を出さずにいま食べていた

←

アリアはこれから旅一緒にをするので

肉のない生活慣れさせておこうと思った

こんな感じ？

それで俺は・・・

『自分は肉が好きだ』

ということを伝えた。

これにて一件落着。俺やアリアの前に肉料理が出てきた。

朝食の後、旅で使うものなどを買ったために町へ繰り出した。

武器屋、防具屋で分かれているようだ。とりあえず、アリアの防具を揃えるために防具屋へ向かった。

防具には頭／胴／腰／脚／靴があるそうだ。一般的には、頭と胴、靴を装備するのが基本らしい。

村長にたんまり？お金をもらっているので、値段的には問題ないだろう

「革の鎧を見せてくれ」

店主にいうとすぐに持ってきてくれた。

「ちょっと、つけてみてくれるか??」

「んゝ、少し重いですね」

「じゃあ、これならどうですか?」

次に店主が勧めてきたのは革のジャケットだ。

これも試着してもらった。

「ん、んっ」

がんばって、ジャケットの紐を締めている。しかし、ちょっときつそうだ・・・胸が。ふにゅん。と潰れている

少し目に悪い、いや、目の保養になるか。おい！店主！鼻の下伸ばすな！！

ほかには、革の膝当て、革のブーツを買った。

なんだかんだで、アリアの防具は整った。次は俺のだ。胴はロブがあるからいいとして、靴だな。俺は動きやすそうな布の靴を。弓を扱うので、布のグローブも買った。

お値段の合計は… 革のジャケット 560メル

革の膝当て 170メル

革のブーツ 230メル

布の靴 220メル

布のグローブ 100メル

合計で1280メルだ。大金貨が10000メルで、金貨が1000メル、銀貨、銅貨が100メル・10メル小銅貨が1メルだから。金貨一枚と銀貨二枚。銅貨八枚だな。

次に武器を買う。できるだけいい武器を買いたいものだ。自分の武器はあるから、アリアの分だけを買えばいいだろう。

「すみません。どういう武器がありますか？」

「剣、槌、片手剣、槍などがあります。」

「どんな武器を使うんだ？」

「お義父さまに習っていたのは、片手剣だけです。」

「店主。片手剣のお勧めはあるか？」

「ここにあるものと、銀の片手剣ですね。」

「ちよつと、持たせてくれるか？」

俺が店主に聞くと、店主は快くokした。

「いいですね。軽くて振りやすいです。」

「それでわそれを。」

と言うと、店主がひどく驚いた顔をした。軽く深呼吸して落ち着くと商談を始めた。

「ごほん。えー、お値段は13500メルになります。」

ああ、なるほど。値段に驚いたのか。村長にもらった金はあわせ

て50000メルを超えていたので問題ない。

「わかりました」

そう言って俺はカウンターに大金貨や金貨を置いた。

「……」

店主は絶句している。ようやく、置かれた金貨に気づくと慌てて動き出した。

「あ、ありがとうございます。」

頭に汗が見えている。いくらなんでも慌てすぎだろう。

買い物が終わって村を歩いていると突然アリアがしゃべりだした。

「ほんとに良かったんですか!？」

「ん? 銀の片手剣のことか? 別にいいぞ?」

値段のことだろうか?

「……」

なぜだろう、沈黙した。

買い物が終わったら村長に行くように言われていた家へ向かう。

そこは魔法使いが住んでいるらしく魔法の基本程度なら一日でできるようになるらしい。

「ふう。けっこう遠いな」

「そうですか?」

アリアはかなり歩きなれているようだ。旅では置いて行かれそうだと、くだらない事を考えていたら目的の家に着いた。

キノコの家……ではなく、普通の家だった。

とりあえず戸を鳴らす。

「……」

もう一度。

「……」

「失礼します。」

中を見るとたくさんの紙や道具が散らばっている・・・こともなくきれいに片付いている。

中に入ると突然斜め前からボウガンの矢が飛んできた。俺は紙一重でよけると、体の中から弓をだし矢をつがえ矢が飛んできた方向に向ける。しかし、そこには無機質な丸が描かれているだけで何もない。矢をおろすと前から2mは軽く越している巨人が出てきた。

「誰だ

「・・・」

「誰だ」

どうやらロボットのようと同じ事を繰り返すようだ。

「俺はクロノ。村長の紹介で来た。」

巨人は黙って下がっていった。

続けて出てきたのは130センチあるかどうかわからない小柄な女の子だった。魔法使いの弟子だろうか。

「私はシクと申します。村長から話は聞いていました。そして、先ほどは失礼しました。お怪我はなかったでしょうか。」

とても澄んだ声だ。

「ええ。大丈夫です。それよりも何故あのような仕掛けを？」

「私が研究した書物を狙った盗賊が入ってることがあるからです。私の書物は高く売れるようなので・・・」

「私の...と言うことは貴女が魔法使いなのですか？」

「はい。もう歳なのでたいした魔法は使えませんが。」

歳・・・？美少女に見えるが・・・

「魔法で外見を変えているんです。本当はおばあさんなんですよ。」
なるほど。便利だな、魔法って。

「私でも魔法を使えるんですか？」

「ええ。すべての人が魔法を使うことができます。もちろん、個人差はありますが。」

「教えてくれますか？」

「ええ。もちろん！それを村長に頼まれたのですから。」

「ではまず、貴方の体の中にある魔力を感じ取ってもらいます。手を出してください。手の上に魔力の塊を乗せます。」

シクが手の上に手を重ねると、自分の手の上に何かが乗っているのがわかる。

「これが魔力です。貴方の体中にあるので探してみてください。」
確かに頭からつまさきまで、体中にそれを感じることができる。

「ありましたか？では、それを手のひらに集めてください。ゆっくりと。」

ゆっくり集めてみる。体がだるい。

「濃い…こんな濃い魔初めて見た…」

「魔力に濃い薄いつてあるのですか？」

アリアがとても不思議そうにたずねる。

「ええ。魔力が濃ければ同じ魔法でも攻撃力が上がります。手のひらに乗っている魔力を体の中に戻してください。」

不思議な心地よさとともに魔力が体の中に戻ってゆく。

「では、こちらへきてください。」

その家のさらに奥へと進んでいく。突然回りが白くなり広い空間に立っていた。

「今から魔法を使ってもらいます。この空間の壁には魔法を防ぐための結界を張りました。まずは火系の魔法を使ってもらいます。」

「魔法を使うには、その魔法の具体的なイメージを持つことが必要

です。ファイアボールだったら燃えている玉をイメージすればいいんです。では、やってみてください。」

俺は、頭の中に火の玉をイメージし小声でファイアボールと唱える。目の前に火の玉がでて、すぐに消えた。

「すごいですね……。一発で出来てしまうなんて。」

「えっ？大抵の人はすぐにできるようになるの??」

「そんなことないですよ。よほど才能がない限り最低で1年以上、訓練してファイアボールができるようになります。」

「弓矢を魔法で作ることはできますか？」

これは完全に思い付きだ。これができるなら矢を持ち歩かなくてもいい。

「できると思います。ちょっとやって見てもらえますか？」

「ええ。わかりました。」

頭の中に矢を思い描く。軽い気だるさと共に手に矢が出てきた。

「これは使える……」

この後は、いろいろなレクチャーを受けた。

人にはそれぞれ得意属性があるとか、得意属性以外の魔法はうまくいかないとか、普通ひとつかふたつの属性しか扱えないとか……とにかく俺は規格外らしい。

それと、俺には治癒系の魔法が使えなかった。その後アリアも同じ事をやっていたが、水系と治癒が得意魔法らしい。

うん。バランスがいいなあ。弓矢も魔法で作れるし。あつ、もしかしたら雷とかの矢も作れるんじゃないかな？

魔法使いに礼をいい、すでに暗くなっている外へ歩いた。村長の家へ向かう。明日出発だ。

「ぎゃあああああ!!」

「!!」

突然村の入り口から悲鳴が聞こえた。

「魔物？」

アリアはそういつと駆け出していった。慌てて俺も追いかけていった・・・

02話〜村にて〜（後書き）

>補足説明<

お金について・・・

単位はメル！

大金貨	10000メル
金貨	1000メル
銀貨	100メル
銅貨	10メル
小銅貨	1メル

クロノ 男 エルフ？

装備

グリンディア（弓）、ローブ、布の靴、グローブ
ステータス

Lv	1
HP	349
MP	245
AP	???
DP	597

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ
ステータス

Lv 3

D	A	M	H
P	P	P	P
2	1	3	3
5	2	4	9
6	4	7	2

駄文ですががんばりたいのでよろしく願います。

誤字、脱字あるかもなのでご指摘、ご指南よろしく願います。

次回は戦闘です。

03話　　魔物襲来

慌てて駆け出していった俺とアリアが見たものは魔物の大群だった。腕が3本だったり、口が大きかったりするが、少なくとも200はいるだろう。

20人近くの人が武装して戦っているが既に押されている。アリアは腰にさしていた片手剣を抜刀し、戦いの中に身を投じた。

俺は体の中からグリンディアを取り出し、魔法で矢を作る。その矢を放ち、また次の矢を作る。体力的な方ではない、別の疲れを感じていた。おそらく、魔力を消費したためだろう。前のほうでは確実に魔物の数が減っていた。しかし、その後ろにもまだまだ魔物がいる。このままでは埒が明かない。

俺は魔法を使うためにイメージを広げる。

（一度に多くの魔物を葬るには、範囲の広い攻撃が必要だろう。必要なのは大きさと、攻撃力。火の玉は無理だ。水は回りに被害が出るから論外。雷は範囲攻撃には向かないし、風も同じ。土は…どうやって使うんだ？論外。いや、待てよ。大きさがなくても持続すれば…）

イメージを固めた俺は、小声で

（ゴリアテ）

と唱えた。

目の前の土が盛り上がり、形を成していく。もう二回、小声で同じものを唱える。土人形のようなものを三つ作った俺は、魔力に物

を言わせて自分が『敵』と認識したものを攻撃するようにプログラミングした。さらに、魔力で土の表面を覆って崩れないようにする。

三体のゴリアテは、俺の思惑どおりに魔物の方へ向かっていく。戦っていた者たちはぎよつと

していたが、ゴリアテが魔物を攻撃し始めると自分たちも攻撃し始めた。

もう半刻ほどたったがまだ魔物たちが途切れる様子はない。既に、最初戦っていた者たちも数人負傷している。

俺は、もう三体のゴリアテを作って送り出した。

これでも若干おされ気味だ。俺はさつき思いついた、矢に属性をつける。をやってみることにした。火の矢、をイメージする。

「熱っ！」

それはイメージどおりにできたが、熱くて放してしまった。ただ燃えているだけではだめだったらしい。

敵に当たってから燃えるというのはどうだろうか。ちゃんとイメージしてから発動する。

手に矢が出てきた。外見は普通の矢だ。魔物に放ってみる。おお、燃えた。結構疲れる。

魔力が少なくなってきたのだろうか。疲れた。魔力は自然に回復するらしいがおそらく寝ないとだめだろう。まだ、普通の矢を出せるから――

「ギヤオオオオオオオ」

「「！！！！」」

あまりの声の大きさに、その場にいた人が全員硬直した。

「お、オルトロスだ!!!」

誰かがそう言った瞬間、戦っていた者の半分が逃げ出した。しかし、半分は何か決意をしたような顔をしてそのまま魔物と戦っている。

「グルルルル」

魔物が一体真上に飛ばされた。二体、三体——次々と飛ばされていく。どうなってるんだ？

ようやくそいつが見えてきた。ケルベロスの頭をひとつ減らしたような奴だ。確か、ケルベロスの弟だ。たてがみ鬣は一本一本がすべて蛇になっている。

オルトロスはふたつの頭を振り回して魔物を吹き飛ばしている。何故だ？仲間割れか？いや、違う。邪魔だったのだ。前に行くのに。

オルトロスが前線で戦っている者の目の前に来た。

ゴリアテが攻撃を仕掛けるが、ある者は大きな牙で、ある者は前足で破壊された。時間稼ぎにもう4体ゴリアテを生み出すが本当に魔力がきつい。こいつらもすぐに撃破されるだろう。何か対策を考えなければ・・・

ゴリアテが戦っている。どうすればいいのか。

あつ。わかった。ゴリアテが小さくて簡単にやられてる。単に大きく、強度も上げてみるか。

そう考えた俺は、さっきの大きさの3倍で、体の表面を覆う魔力

をできる限りあげてみた。予想通り・・・いや、それ以上だった。オルトロスの噛みつきを左手で止めると右手で頭をに殴った。さらにもう片方の頭も殴ると、プロでも認めるであろう見事なボディブローを決めた。

オルトロスは巨体を大地につけ、消えた。

さっき出した巨大ゴリアテに残った魔物の相手をさせている。村の近くにいた魔物は全滅していたが、少し遠くにいる魔物が数体いたので弓で葬ることにした。一体、二体と順調に葬っていったが三本目の矢を作り出そうとした瞬間、意識が途絶えた――

03話 〓魔物襲来〓（後書き）

>補足説明<

クロノ 男 エルフ？

装備

グリンディア（弓）、ローブ、布の靴、グローブ
ステータス

Lv. 4

HP 394

MP 462

AP 585

DP 597

使用魔法

ファイアボール、ウォーターボール、サンドボール、
ブラストボール（〓〓ボール）

ゴリアテ（三倍も）

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ
ステータス

Lv. 5

HP 426

MP 374

AP 153

DP 273

使用魔法 ウォーターボール、ヒール

戦闘書くのは難しいですね。それに少し短いです。
次回はもっとがんばります。

04話　　騒動？

再び覚醒した俺の手には柔らかい感触、人肌の温もり。それはびくつとしたようにふるえた。その後、彼女は俺の上に跨り腰を振っていた。しかしその意識もすぐに途絶えた。

気持ちのいい朝だった。窓からは心地いい光が差し込み、体の調子もいい。昨日も降りた階段を降り、リビングへと向かっていく。そこには凄く『良かった』と緩んでいる村長と、今にも泣き出しそうな顔のアリアがいた。二人の前にはやわらかそうなパンやスープ。ミディアムに焼かれた肉。噛むとしゃきしゃきそうなサラダがあった。

そういえば凄く腹が減っている。まるで何日も何も口にしなかったような・・・、そんな感じた。

「やつとお目覚めですか！」

「ああ。『やつと』って事はどれぐらい眠っていたんだ？」

この世界に来てから、言葉から何かを見つけることがうまくなっていた。

「およそ三日ほどです。魔力を全部消費していたようなのでアリアに添い寝をさせました。」

（ん？添い寝？あの柔らかい感触って…）

「!!!!!!」

「な、何か失礼なことはありませんでしたでしょうか!？」

当然廃人だった俺に彼女が居るわけもなく、女性経験もなかった。

「なっ、何故添い寝が必要だったのでしょうか？」

「魔力を消費しすぎると生命を維持する能力が低下します。これは、急激に魔力を回復させるためにマナを消費するためです。マナとは生命エネルギーのことで、これがすべてなくなると死にいたるとされています。」

生命を維持する能力が低下していたので、体温も低下します。それを防ぐために添い寝をさせました。」

「……………////」

アリアが顔を真っ赤にしている。耳まで真っ赤だ。

「いや、なかったはなかったけど……………」

「はぁ……………」

村長がとても心配そうな顔で見てくる。

「その…………多分…………ですけど、交わったんですよね。はい。」
「……………」

今度は村長が沈黙しちゃったよ。どうしよう。

あえて、こっちから切り出してみる。

「とりあえずお腹が減ったんですけど…………食べませんか？」

「ええ。（はい）」

またまた無言。食器が擦れる音のみ！凄い気まずい。

「ちょっと席をはずす。」

そう言って村長はアリアと共に廊下へ出て行った。

「~~~~~」

ちよつと聞き取りにくいが頑張れば聞き取れないこともない。

「お前はそれを分かってやったのか！」

「はい。お義父様。」

「くっ・・・」

いつもの温和な態度が嘘のようだ。

「もう、勝手にしろ！つたく、奴隷市から買ってきて楽しみにしていた物を！！！」

戻ってきた村長にはいつもど通りのスマイルが貼り付けられていた。

アリアが奴隷？つか、奴隷ってOKなの？

「「「ご馳走様でした。」」」

全員が食べ終わったところで俺は話を切り出した。

「できればすぐにこの村を出ようと思うのですが・・・？」

「はい。分かりました。今から出ても十分間に合うと思います」

いつもど通りの丁寧な対応・・・俺はそれが怖かった。

今は早朝である。ここに来てから俺も早起きになった。

いよいよ出発である……

04話　～騒動?～（後書き）

>補足説明<

奴隷：奴隷は奴隷市で扱われる商品である。男はダンジョンを探索するための手駒として、女は性欲を解消するために購入されることがほとんどです。

短かったですがつなぎです。できれば明日にはupしたいとおもいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3470z/>

異世界とオレとハーレムと？

2011年12月21日21時46分発行